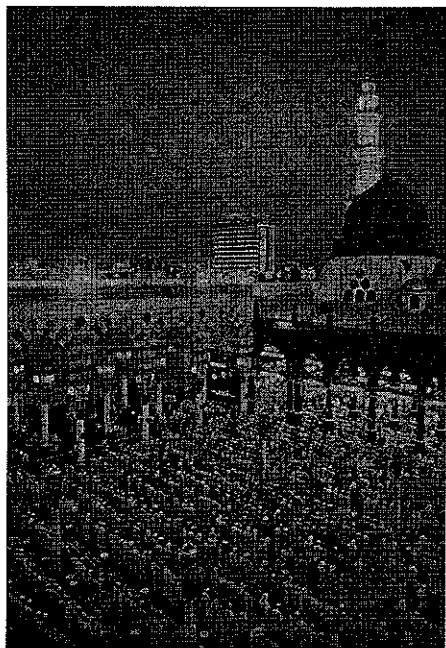


第四章
預言者ムハンマド



マディーナの預言者のモスク

1 預言者とは何か

神の託宣を語る

イスラームの教義は「アッラーフの他に神はない。ムハンマドはアッラーフの使徒である。」という信仰告白の表現に凝縮される。

ムハンマドの使徒性は、アッラーフの唯一性につぐイスラームの根本教義である。それゆえイスラーム教徒たちが、今日にいたるまで「ムハンマド」を主題に、不断の考察、探求を重ねてきたことは当然と言えよう。

イスラーム学は当初より厳密な資料批判の手続きにのっとり、「歴史的」に真正な伝承を捏造された伝承から区別し、ムハンマドの「歴史的」実像を保存してきた。したがって「史的ムハンマド」は、モーセ、仏陀、孔子、イエスなどの場合とは異なり、「現代の」歴史学、文献学の批判的方法を用いることによってのみ、神話の彼方におぼろげにその実像を垣間見ることができるような伝説上の存在ではない。

しかしそのことはムハンマドが、「現代の」歴史学の認めるところの「歴史上の人物」に還元しうることを意味するわけではない。

日本語の「預言者」とは、ユダヤ／キリスト教に由来するヘブライ語 (nabi) の翻訳語であり、「旧約」聖書に描かれた「神の託宣を語る者」、すなわち「ヤハウエの代弁者」たちを指す。ユダヤ／キリスト教と同じ伝統を共有するイスラームにおいても、「預言者 (nabi)」の語の基本的意味は同じである。マイモニデス (一一〇四年没) の信仰の「三原則が、預言書への信仰の義務を説くほか、モーセを最大の預言者と位置づけ、モーセがシナイで授かった律法 (トーラー) の永遠の妥当性を定めていることから分かるように、ユダヤ教では「預言」は神と人をつなぐきわめて重要な概念である。他方、キリスト教では、イエスが預言者ではなく「神の子」とされ、神と人の仲介者とされたため、「預言」の地位は相対的に貶められる。

「使徒」「預言者」「聖者」

イスラームは「預言」を神と人の関係の鍵概念として厳密に再定式する。

アッラーフは存在論的に世界と隔絶した超越神であると同時に、世界とコミュニケーションを行う人格神でもある。そしてイスラームにおいては、「預言」が神と人間のコミュニケーションの範型となる。ムハンマドが最後の預言者であることは、イスラームの根本教義の一つである。しかし一方でイスラームは、神とのコミュニケーションの可能性をすべての時代のすべての人間に対して認めてもいる。これは「使徒」と「預言者」、「聖者」の概念上の区別によって可能になる。

イスラームにおいては、「預言者」とは「聖法の啓示を授かった者」を意味する。預言者は一方で聖法の啓示によって、単なる靈感の所有者たる聖者とは異なり、他方、他者への聖法の宣教の義務の不

在によって「使徒」と区別される。

つまり預言者の中でも特に固有の聖法の啓典を授かり、その宣教を命じられた者が、「使徒」と呼ばれるのである。すべての使徒は預言者でもあるが、すべての預言者が使徒であるわけではなく、預言者の数は一二万四〇〇〇人、使徒の数は三一三人とも言われる。使徒の中でも最も卓越した者が、「重責の主」と呼ばれる五大使徒であるが、上位から順に並べるとムハンマド、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーセ）、イーサー（イエス）、ヌーフ（ノア）となる。ちなみにクルアーンで言及されている啓典はムーサーの『律法』、ダーウード（ダビデ）の『詩篇』、イーサーの『福音書』、ムハンマドの『クルアーン』の四書のみであり、クルアーンに名前が記されている預言者は、新旧約聖書に登場する人物と同一可能なアダム（アダム）、イドリース（エノク）、ヌーフ（ノア）、イブラーヒーム（アブラハム）、ルーツ（ロト）、ヤークーブ（ヤコブ）、イスマール（イシマエル）、イスハーク（イサク）、ユースフ（ヨセフ）、アルヤサア（エリシャ）、イルヤース（エリヤ）、ムーサー（モーセ）、ハールーン（アロン）、ダーウード（ダビデ）、スライマーン（ソロモン）、ユースス（ヨナ）、アイユープ（ヨブ）、ズー・フル・キフル（エゼキエル）、ザカリヤ（ゼカリヤ）、ヤフヤー（ヨハネ）、イーサー（イエス）の二一名、クルアーンのみに現れるサーリフ、シュアィブ、フード、ムハンマドの四名の、合計二五名である。

「預言者」は「使徒」よりは広い概念であるが、「聖者」よりは狭い概念となる。イスラームの「聖者（waly）」は動詞「walya（近くにある）」から派生した名詞で原義は「ちか（近／親）しい者」であり、転じて「神にちかしい者」すなわち「聖者」を意味するようになった。

預言者や使徒がアッラーフからの一方的な選り「召命」によって共同体全体を拘束する社会規範たる聖法の啓示を授かるのに対し、聖者は個別の事象に関する靈感を授かるに過ぎず、その位階には修行の結果によって達することも可能である。

アッラーフの人類に対する使徒、預言者の派遣は「諸預言者の封印」（クルアーン三三章四〇節）ムハンマドをもって終わり、彼の後にはもはや預言者は決して現れてはならず、彼が授かった啓典クルアーンは最後の啓典であり、彼に啓示された聖法は最後の審判にいたるまで人類すべてに妥当する究極の法となる。しかし個人のレベルでは、人は誰でも修行を積むことによってアッラーフからの靈感を賜る「聖者」となる道は原理的に開かれており、神と人とのコミュニケーションは絶えることはない。

預言者は神の選り、召命によるが、イスラーム神学は、預言者の必要条件として正直、誠実、宣教、賢慮の四つを挙げる。すなわちアッラーフの御言葉託される預言者は、決して虚言を吐かず、不行状がなく、真実を包み隠さず述べ伝え、何者にも欺かれぬ叡知の持ち主でなければならぬ。またイスラームは超人的性質を預言者性の必要条件とはしない。したがってイスラーム神学上、飲食、睡眠、結婚など一般人の日常生活において許されることはすべて、預言者にも許されることになる。

イスラームはすべての預言者、使徒への敬愛を命ずるが、現実に信徒の生活を拘束するのは最後の預言者ムハンマドのもたらした聖法である。それゆえ、イスラームにおいて、定冠詞（*al*）をつけて単に「預言者（*al-nabiy*）」、「使徒（*al-rasul*）」と言った場合、それは通常ムハンマドを指し、教義学における考察の対象となるのも、ムハンマドの授かった預言、啓示に他ならないのである。

2 預言者の召命

理性による判定

ムハンマドは預言者としての生涯に多くの啓示を授かる。一冊の啓典としての「クルアーン」は、こうした啓示の一部をなす。といっても『クルアーン』は一度に啓示されたわけではなく、天使ジブリール（ガブリエル）が啓示を携えて最初にムハンマドのもとに降臨した六一〇年以來、六三二年に亡くなるまでの二二年の間に断続的に少しずつ下されたものである。

召命以前のムハンマドは「正直者」の異名をとる商人であった。ムハンマドはマッカの支配的部族クライシュ族の名門ハーシム家の出身であったが、父アブド・アッラーフは彼が生まれる前に亡くなり、母アミーナも幼くして世を去り、祖父アブド・ル・ムッターリブ、その死後は叔父アブー・タリーブのもとで養われた孤児であった。幼少時は牧童なども経験したが、早くも一二歳にしてシリアへの隊商に随行し、誠実で有能な商人の評判をかちえ、二五歳の時、年上の未亡人の女性実業家ハディースと結婚する。

ムハンマドは四〇歳になる頃から、山に籠もって瞑想にふけることが多くなるが、最初の召命体験はこの山籠りの瞑想中に生じた。

預言者の言行録（ハディース）集成「サヒーフ・アル・ブ・ハリー」に収められたアイシャの伝え

るハディースによると、クルアーンの啓示は以下のように始まった。

使徒がヒラー山の洞窟で山籠りされていたとき、真理が到来した。すなわち天使が現れ、使徒に「読め。」と語りかけたのである。

使徒自身はその状況をこう語っている。

「私は読めません。」と言うと、天使は、私をつかみ、覆いかぶさり、苦しむと離し、また「読め」と言った。私はまた「私は読めません。」と言ったが、天使はまた私をつかみ、覆いかぶさり、苦しむと離し、また「読め。」と言った。私はもう一度「私は読めません。」と言ったが、天使は三度私をつかみ、覆いかぶさり、苦しむと離し、「読め。創造を成された汝の主の御名において読め。凝血から人間を創造された御方。読め。汝の主は最も尊い御方。筆とる術を教えられた御方。人間にその知らぬことを教えられた。」（クルアーン第九章一―五節）と言ったのである。

この伝承は、預言者としての召命がムハンマドにとって予想外であったことを物語っている。この伝承は、神の啓示に際して「私は若くてどう語っていいか知りません」と応えたユダヤの預言者エレミヤの召命体験（「エレミヤ書」一章六節）を思い起こさせよう。

こうして最初の啓示を授かったムハンマドは、妻ハディースのもとに戻り、彼女に自らの召命体

驗を物語り「私は自分が恐ろしい」と語った。するとハディージャは「アッラーフにかけて、アッラーフはあなたを決して辱められませぬ。あなたは親族を大事にし、万人に親切にし、貧者に施し、客をもてなし、不幸に見舞われた者を助けてきたではありませんか」と言った。

そしてハディージャは、キリスト教徒で聖書に通じた従兄弟のワラカを審神者として招き、ムハンマドの体験の判定を依頼した。そこでムハンマドの話を聞いたワラカは、「それはモーセに降臨したのと同じナームース（啓示伝達の天使ガブリエル）である」と断定した。

ムハンマドの召命の伝承は、まずムハンマドの召命が彼自身が望んだものというよりも神の選びの結果であったこと、そしてその召命の真正性の判定基準が、まず良識になつた過去の正しい行状であり、次いで過去の聖書の預言者たちの諸事例との合致であつたこと、つまりいかなる瑞祥、超常現象、奇跡でもなく、理性による判断であつたことを示している。

奇跡の証は詩的美

奇跡物語の欠如はムハンマドの宣教の顕著な特徴となつてゐる。病氣治し等の奇跡に満ち満ちた聖書のイエスの福音書に比べてムハンマドの伝記には奇跡はほとんど登場しない。また福音書においては、奇跡は福音の真理の証しであり、イエスの奇跡を目の当たりにすることによって多くの人々が信仰した、と記述されている。

他方、クルアーンにはムハンマドの奇跡物語はほぼ皆無である。唯一の例外とも言うべき「時は近づき、月は割れ、しかし徴を見ても、彼らは背を向け、「束の間の魔術だという」(クルアーン五十四章

一一二節)という月の分割の奇跡においても、クルアーンの文脈における奇跡の位置づけは福音書とはまったく違う。たとえ明白な奇跡を見せつけられたとしても、心のかたくなな不信仰者は決してイスラームの使信を受け入れないと、奇跡によって人は信するのではないことが明らかにされているのである。

後のイスラーム学は、内容のみならず詩的韻律の美しさにおいても完璧なクルアーンそれ自体が、人知を超えた奇跡である、としてクルアーンを預言者ムハンマドが授かつた最大の奇跡と呼ぶことになる。

預言者の神授の使命の証しである奇跡をアラビア語では「ムウジザ」と呼ぶ。「ムウジザ」とは字義通りには「相手を無力にするもの」を意味する。つまりその預言者の業が、人力のおよばぬ神の御業に他ならぬと認めざるをえなくさせるもの、預言者の宣教の反論を不可能ならしめるもの、を意味する。

ムーサー(モーセ)の時代のエジプト文明は魔術に優れ、それを誇つていたために、ムーサーは預言者の徴として、人の業を超えた方術の奇跡を授かつた。イーサー(イエス)の時代のギリシャ文明は優れた医術を誇つていたために、イーサーは預言者の徴として、いかなる名医にも治せない足萎えを歩かせ、死者を蘇らせる奇跡を授かつた。ムハンマドの時代のアラブは詩を尊び詩才を誇つていたために、アッラーフはいかなる詩人にもまねのできないクルアーンを預言者の証しとしてムハンマドに授けられた。そしてアラブ文学史上、なお今日にいたるまで、クルアーンに匹敵する完璧なアラビア語の作品は一つとしていまだに現れていない。ムスリムがクルアーンを永遠の奇跡と呼ぶのはそのためである。

3 ムハンマドのシャリーア

法Ⅱ救済への道

我らは汝（ムハンマド）を万事のシャリーアの上に置いた。それゆえそれに従え。（クルアーン四
五章一八節）

すでに述べたように「使徒」とは「固有の聖法の啓典を授かり、その宣教を命じられた者」であった。「聖法」を意味するアラビア語の「シャリーア」の原義は「水場にいたる道」であったが、転じて「救済への道」、「教えの道」を意味するようになる。シャリーアは「聖法」とも訳されるが、それはシャリーアが信仰簡条だけでなく、多くの戒律、社会規範を含んでいるからである。

それゆえ「ムハンマドはアッラーフの使徒なり」というイスラームの信仰告白の後段は、ムハンマドが授かったシャリーアを遵守するとの誓約を含蓄する。

律法を敵視するキリスト教を出自とする宗教学は、法、戒律を忌むべき束縛、瑣事に拘泥する愚昧な形式主義として描き、「法」が古来より誇るべき文明の象徴であったことを見過しがちである。

「東京全市は、一日の憲法発布をひかえてその準備のため言語を絶した騒ぎを演じている。到るところ、奉勝門、照明、行列の計画。だが滑稽なことには、だれも憲法の内容を御存じないのだ。」と

の『ベルツの日記』を引き（『天皇と日本の近代（下）「教育勅語」の思想』、二九六頁）明治憲法を「原理的に天皇を祀り主とする、すべてのひとびとが神々にたてた御誓文」、「ヤハウェならぬ現人神の、七十六箇条からなる律法」（『天皇と日本の近代（上）憲法と現人神』、二五七頁）と規定する八木公生もまた、この立法の宗教的、祝祭的性格を指摘している。

西欧と対等の文明国の仲間入りするために憲法制定を急いだ明治の日本、アメリカから授けられた「民主憲法」を後生大事に奉る戦後の日本。日本近代史はこの文明の象徴としての「法」の機能を鮮やかに映し出している。

「法」が文明の象徴であったとの認識を欠いては、なにゆえアラブがアッラーフの使徒ムハンマドの宣教をかくも熱狂的に受け入れたのかは理解できない。

成文法を持たないムハンマド出現以前のアラブの多神教徒は、天啓の聖法「律法」を持つユダヤ教徒、「福音書」を持つキリスト教徒、いわゆる「啓典の民」に対して劣等感を抱き、天啓法を持たない自らを一段劣る無学、無法の未開の民とみなしていた。

ムハンマドはこの未開のアラブの民に聖法を、しかもユダヤ教徒の『律法』、キリスト教徒の『福音書』にも優る最善の聖法、シャリーアをもたらしした。こうしてムハンマドのシャリーアの下に団結し、「文明化」され、「法治国家」の「国民」となったとの誇りと自信を持つことよって初めて、アラブ・ムスリムは当時の先進文明国であったローマ帝国の領土の大半とベルシャ帝国を征服し、イスラームに基づく新秩序の樹立という大事業を臆することなく成し遂げることができたのである。

シャリーアとは先述のごとく、語義的には「教えの道」を意味するが、具体的にはクルアーンと預

言者のスナナ（言行）の教示の総体を指す。

上記のクルアーンの句「我らは汝（ムハンマド）を万事のシャリーアの上に置いた。それゆえそれに従え。」の「それに従え」の命令の主体はアッラーフであり、客体はムハンマドである。シャリーアの立法者はアッラーフであつてムハンマドではない。

確かにムハンマドはシャリーアの権威に服する。しかし他のムスリムから見た場合、シャリーアに服するムハンマドの姿はそれ自体が倣うべき模範となる。

そしてアッラーフと使徒に服従せよ。（クルアーン第三章一三二節）

信徒たちはアッラーフに服従するムハンマドに服従することによりアッラーフに服従する。

妻アイイシャがムハンマドについて「彼の人格はクルアーンでした」と語っている通り、信徒にとつては、クルアーンの教えの神髄を体現するムハンマド自身が、第二のクルアーンとも呼ぶべき無謬の権威であつたのであり、それゆえ預言者ムハンマドの預言者の言行（スナナ）の記録（ハディース）は、イスラーム法上、クルアーンに次ぐ第二の法源の地位を獲得するのである。

4 クルアーンとハディース

「二冊の書物」＝クルアーン

シャリーアはクルアーンとスナナからなる。言い換えれば、預言者ムハンマドの啓示（wahy）には、最終的に一冊の書としてまとめられる形で下された、一群の明示的なアッラーフの御言葉の束としてのクルアーンと、預言者の言行スナナの中に読み取り得る、アッラーフから預言者に明に暗に示された教導の二つの形態があつたことになる。

クルアーンとは本来的に天地の創造に先立ち天の書板に書き記された一冊の「書物」である。それが啓示を司る天使ジブリール（ガブリエル）によつて、二二年間に分けて段階的にムハンマドに下された。ムハンマドの逝去の直前に最後の章句が下され、ジブリールの指示により、現行の順序に編集されて現在ある形の通りに一冊の書物にまとめられたものである。

ただし、「二冊の書物」とはいつても、ムハンマドに下された啓示が、自動書記のような形で文字に書き留められたわけではない。そもそもムハンマドは文盲であり、彼の啓示は人々に声を出して読み聞かされ、それを人々が復唱し暗唱した上で人々に伝える、という口承によつて保持されていた。しかしムハンマド逝去後の「背教戦争」によつてこうしたクルアーン暗唱者たちの多くが戦死したため、クルアーンの伝承にノイズが生じるのを恐れた第三代カリフ・ウスマーンの治世中にクルアーンの結集が行われ、文字によつて書き留められた現在のクルアーンの原本が成立したのである。このウスマーンの命令によつて作成されたクルアーンの写本をウスマーン本と呼ぶが、ウスマーン本は五冊の写本が作成され、当時の主要都市に配布されたが、そのいくつかは今にいたるまで現存している。

第三代カリフ・ウスマーンは、後述の通り最初期に入信し、二〇年以上にわたつてムハンマドにつ

き従った高弟の一人であった。つまりクルアーンは、ムハンマドの逝去後間もなく多くの直弟子たちが生存している間に、自らも高弟の一人であったカリフの命令によって国家事業として欽定版きんていばんのテキストが作られたのである。ここにイスラームの經典クルアーンと、教祖の死後、数百年を経て、なおテキストの決定をしていなかった伝典、新訳聖書との決定的な相違が存在する。

伝承の集成Ⅱハディース

一方でスンナについては、ムハンマドの召命に先立ってどこかに『スンナ』という書物が存在したわけではなく、またムハンマド自身が「これが『スンナ』である」と述べた書物があるわけでもない。スンナとは、あくまでも弟子たちが伝えた折々の彼の言行が、後の世になって集成者たちによる真贋の判定を経て厳選されてまとめられたものである。集成者たちの収録したスンナの範囲はそれぞれの集成者によってまったく異なっており、一冊の『スンナ』、あるいは『ハディース』というものがあるわけではない。

例えばスンナ派では最も権威があるとされており、邦訳も存在する『サヒーフ・アル・ブ・ハーリー』は、ハディース集成者のアル・ブ・ハーリーが収集した約一〇〇万のハディースの中から、真正と判定したハディース約七三〇〇のみを収録している。

この『サヒーフ・アル・ブ・ハーリー』の収める最初のハディースは以下の通りである。

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アル・タイミーが私に以下のように語ったと、ヤフヤー・

ブン・サイード・アル・アンサーリーが言ったと、スフヤーン(ムハンマド・ブン・ウヤイナ)が我々に伝えた、と述べた、と、アル・フマイディー・アブド・アッラーフ・ブン・ズバイルが我々(アル・ブ・ハーリー)に伝えた。

アルカマ・ブン・ワッカース・アル・ライシーが、「私は、ウマル・ブン・アル・ハッターブ——アッラーフが彼を嘉し給いますように——は説教壇の上から、以下のように言うのを聞いた。」と。

私はアッラーフの使徒——アッラーフが彼に祝福と平安を賜りますように——が「行為はただ意図による。誰にも意図したことのみが帰される。ヒジュラ(マディーナへの亡命・後述)が現世を手に入れるため、女性と結婚するための亡命であった者は、ただ彼がそのためにヒジュラしたもののためにヒジュラしたに過ぎない。」と言われたのを聞いた。

このうち、

「預言者ムハンマド↓

ウマル・ブン・アル・ハッターブ↓

アルカマ・ブン・ワッカース・アル・ライシー↓

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アル・タイミー↓

ヤフヤー・ブン・サイード・アル・アンサーリー↓

スフヤーン(ムハンマド・ブン・ウヤイナ)↓

アル・フマイディー・アブド・アッラーフ・ブン・ズバイル↓
アル・フハリール

という伝承者の名前を伝える部分を「伝承経路(イスナード)」と呼び、ムハンマドの言行を伝える「アッラーフの使徒——アッラーフが彼に祝福と平安を賜りますように——が『行為はただ意図による。誰にも意図したことのみが帰される。ヒジュラ(マディーナへの亡命・後述)が現世を手に入れるため、女性と結婚するための亡命であった者は、ただ彼がそのためにヒジュラしたもののためにヒジュラしたに過ぎない。』と言われた。」

を「本文(マトン)」と呼ぶ。

またシーア派の尊重するアル・クライニーの『ウスール・アル・カーフィー』が預言者から伝える最初のハディースは以下の通りである。

アリー・ブン・イブラーヒーム(ブン・ハシム・アル・クンミー)經由、その父(イブラーヒーム・ブン・ハシム・アル・クンミー)經由、アル・ナウファリー(フサイン・ブン・ヤズィード)經由、アル・スクニー(イスマーイール・ブン・アビー・ズィヤード)經由で、アブー・アブド・アッラーフ(フサイン・ブン・アリー)——彼に平安あれ——は、「預言者——アッラーフが彼に祝福と平安を賜りますように——が『あなたがたに誰かについて行状の良さを伝えられたとしたら、その者の理性について調べなさい。なぜなら人はただ彼が理解したことによってのみ賞罰を受けるのだから。』と言われるのを聞いた」と述べた。

「伝承経路」は

「預言者ムハンマド↓

フサイン・ブン・アリー↓

アル・スクニー(イスマーイール・ブン・アビー・ズィヤード)↓

アル・ナウファリー(フサイン・ブン・ヤズィード)↓

ハシム・アル・クンミー↓

アリー・ブン・イブラーヒーム(イブラーヒーム・ブン・ハシム・アル・クンミー)↓

アル・クライニーであり、

『あなたがたに誰かについて行状の良さを伝えられたとしたら、その者の理性について調べなさい。なぜなら人はただ彼を理解したことによってのみ賞罰を受けるのだから。』が「本文」である。

以上の二例からも分かるように、「伝承経路」と「本文」の組み合わせが「一つ」のハディースであり、そのようなハディースの集成が、アル・フハリールによるものは『サヒーフ・アル・フハリール(アル・フハリールによる真正伝承)』、アル・クライニーによるものは『アル・カーフィー(十全)』とそれぞれ呼ばれている。

そしてスンナ派ではアル・フハリールの『サヒーフ・アル・フハリール』を初めとして、『サヒーフ・ムスリム』、『スナン・アル・ティルミズィー』、『スナン・アブー・ダーウード』、『スナン・アル・ナサーイー』、『スナン・イブン・マージャ』の六書、シーア派では『アル・カーフィー』を初めとして、『アル・タフズィーブ』、『アル・イスティバサール』、『マン・ラー・ヤフドゥルフ・アル・ファキー

フ』の四書がとりわけ高い権威を有するハディース集と認められている。

このようにクルアーンとハディースは共にイスラームの聖典(ナッス)と呼ばれるが、その成立の過程も、書物としてのあり方もまったく異なるのである。

5 預言者伝

伝記への関心は薄かった

預言者ムハンマドの家系から説き起こし、誕生、預言者としての召命、せいせん聖遷、多神教徒との戦い、マッカ再征服、逝去といった形で時系列に沿って編まれた「伝記」としては、最古のものはイブン・ヒシャーム(ヒジュラ暦二二三あるいは二二八年 西暦八七五年あるいは八八〇年没)が再録したヒジュラ暦二世紀の伝承学者イブン・イスハーク(同一五二年 西暦七七四年没)の「預言者伝」である。

キリスト教でイエスの「伝記」である「四福音書」が「聖典」とされたのとは異なり、イスラーム学の伝統の中では、ムハンマドの「伝記」——文学的創作としての伝記とはもちろん異なる——は、「ムハンマド」研究の中心とはならなかった。イスラーム学の中のムハンマド研究の核はハディース学である。ハディースは、上述のアル・ブハリとアル・クライニーが伝えたハディースの例からも分かる通り、ほとんどの場合、日時を伝えていない。またハディース学の関心は主として伝承者の記憶力、正直さなどの吟味に基づく伝承批判にあり、ハディース学者たちもハディースの語られた日

時、場所等の文脈の同定にはそれほどの関心を抱いていない。この意味で、ハディースはムハンマドの言行の日時を確定し、時代順に再構成した、といった意味においての「歴史的記録」ではない。

ハディース学におけるこの「歴史的関心」の稀薄さは、イスラーム学が「ムハンマドの言行」を、時代を超えて妥当する「超歴史的」な模範・規範とみなすことと相関する。それはハディース集成において、フィクフ(イスラーム行為規範体系)の主題にほぼ対応する主題別に配列された「アル・ムサンナフ(分類されたもの)」形式が主流となったことから明らかである。すなわちハディース編集の主たる目的は、ムハンマドの行為を「歴史的」に記録することではなく、「超歴史的」な模範として呈示することにあつたのである。

イスラーム法学は確かにムハンマドの言行を、時代と場所を超えてすべてのムスリムを拘束する「超歴史的」な行動規範として定式化した。

しかしイスラーム法学においては、ムハンマドの言行が「超歴史的」規範であるとしても、次節で触れるスーフィズムの超越的ムハンマド観とは異なり、ムハンマド自身はあくまでも「歴史的」な存在である。すなわち、ムハンマドは西暦六三二年にマディーナで没した「歴史的」存在であり、それゆえ歴史的に正当な手続きを経て、この「歴史的」ムハンマドにさかのぼりうる信憑性を有するハディースだけが、イスラーム法学の法源となりうるのである。

復活は近代になってから

ハディース学が過去に無数の「ハディース集成」とその注釈、伝承者研究の膨大な蓄積を産出した

のに比して、前近代においては、イブン・イスハークの預言者伝以来、預言者伝の領域では目をひく業績は生れていない。預言者伝という著述形式が新たに脚光をあびるのは、今世紀前半にインドで「伝記(Sira)運動」と呼ばれる預言者伝の研究が興隆して以降であった。少し後れてアラブ世界にも同様の動きが見られ、また今日では、欧米のムスリム学者の手になる優れた研究も生まれつつある。

この現代イスラーム学の預言者伝形式の選好には二つの理由があるように思われる。第一に、西欧によるイスラーム世界の植民地支配という現実により、イスラーム世界の西欧に対する科学的、政治的、軍事的劣位が暴露され、近代科学的世界観によってスーフイー的な「神話的」ムハンマド像に代わり、過去の偉大なイスラーム帝国の創設者、一人の人間としての「史的ムハンマド」への新たな関心が呼びさまされたことが挙げられる。つまり、「客観性」を装うオリエンタリストによって「粗野な廣預言者」、「性的に放縱な野心家」にまで貶められたムハンマドのイメージを救うためには、史的なムハンマドの「実像」を明らかにする必要があるのである。なぜなら問題になっているのは歴史的に存在したムハンマドの生涯であり、超越的、神話的なムハンマドの威光ではなかったからである。

第二には、イスラーム世界が一八世紀以来徐々に西欧により植民地化され、一九二三年にはオスマン朝カリフの廃位により、イスラーム法の支配とイスラーム共同体の一体性の象徴であったカリフ制(イスラーム国家)自体が消滅する危機的状況下にあつて、ムスリムたちが、マッカでの受難、聖遷後のマッカの多神教徒、マディーナのユダヤ教徒、偽信者との困難な戦いを通じてイスラーム国家の基礎を確立したムハンマドの生涯に、イスラーム国家再建の指針を求めるようになった結果である。つ

まり伝統的イスラーム学が、イスラーム法を護持するイスラーム国家の存在を前提に、イスラーム法の法源としてのムハンマドの言行(ハディース)の研究に力を注いできたのに対して、イスラーム国家の不在の現状にあつて、イスラーム国家の再建の指針を求めるには、ムハンマドの個々の言行の「集成」より、その生涯の全体を——イスラーム国家建設のダイナミックな過程として——統一的に把握しようとする「伝記」の形式の方がより適切であつたからなのである。

6 超越的ムハンマド

救済者

ハディース学におけるムハンマドが、信徒にとつての超歴史的模範でありつつも、あくまでも「歴史的存在」であつたのに対して、「超歴史的存在」としてのムハンマド像を發展させたのはスーフイズムである。

仏教でも、仏陀を、紀元前五〜六世紀頃に生きた歴史的な仏陀シャークヤムニ(色身、父母身)と、永遠不滅の法(ダルマ)と一体化した超歴史的な仏陀(法身、実身)に区分する思想が生れた。また小乗仏教の「法を説く導師」としての仏陀に対し、大乘仏教は、超歴史的に存在し、祈願者に応答する仏陀、「救済者としての仏陀」である久遠仏を考へることにより、仏陀を信仰の対象とした。

スーフイズムもまた、ムハンマドを六〜七世紀にアラビア半島に生きた単なる「人間」とは考へない。

アダムがまだ土と水の間にあった時、私はすでに預言者であった。

ムハンマドの言葉とされるハディースである。

また教友の一人ジャービルに、

「アッラーフが最初に創造されたものは何でしょうか。」

と尋ねられた時、ムハンマドは、

「ジャービルよ、それは汝の預言者（ムハンマド）の光である。」

と答えたとも伝えられている。

スーフィズムは、これらのハディースについて思索を重ね、ムハンマドの本質を、世界の創造に先立ち存在し、むしろ世界創造の原因ともなるような超越的な存在（＝ムハンマド的）と考え、仏教における仏陀の「色身／法身」の区別に近い、二重の存在としてのムハンマド観を発展させた。現代のスーフィー、イドリース・シャーもまた、イブン・アラビー（西暦二四〇年没）のムハンマド観について言う。「ムハンマドには、二つのヴァージョンがある。一つは、メッカとメディナで暮らしていたムハンマドであり、もう一つは、永遠なるムハンマドである。彼（イブン・アラビー）が語っているのは後者のほうのムハンマドである。」（イドリース・シャー『スーフィー』、一八一頁）

またスーフィズムは、最後の審判に際する救済におけるムハンマドの執成しとらなの役割を強調し、ムハンマドへの執成しの祈願の功德くどくを説いた。それゆえスーフィズムでは祈願に応える超越的な救済者と

してのムハンマド像が前景に現れることになった。

このようにムハンマドはスーフィズムにおいて、ある意味では大乘仏教に於ける仏陀にも似た超越的存在とされていったのである。

このように「史的ムハンマド」と「超越的ムハンマド」が重ね合わせられていたのが、前近代のイスラーム世界のムハンマド観の特徴であった。

このような超越的ムハンマドは、超歴史的存在として、篤信者とくしんしやにとっては同行者となる。

シャーズィリー教団の名祖アブー・アル・ハサン・アル・シャーズィリー（二二五八年没）は、「もし私が一瞬であれ預言者様のお姿を見失ったとしたならば、私は自分を生者のうちには数えない」と述べた。

またリファアイー教団の名祖アフマド・アル・リファアイー（一一七八年没）が、マディーナの預言者廟に参詣した時には、預言者ムハンマドが墓の中からリファアイーに手を差し伸べ、それはその場にいたすべての人々によって目撃されたといわれる。

また現代においてもなお同様に、エジプトのスーフィー、アフマド・ラドワーン（一九六七年没）は「二五回呼吸する間であれ、アッラーフの使徒様のお姿が見えなくなれば、私は自ら死んでしまうだろう」との言葉を残している。このアフマド・ラドワーンの弟子もまた預言者の姿を拝した経験をアメリカの人類学者ヴァレリー・J・ホフマンに対して以下のように語っている。

私はアフマド・ラドワーン先生が亡くなった後、預言者様への思慕をつのらせ、その声を聞く

ようになり、やがて預言者様のお姿を見るにいたりしました。

預言者様に「アッラーフの使徒様、神秘的開示は何処にありましよう？」と尋ねました。

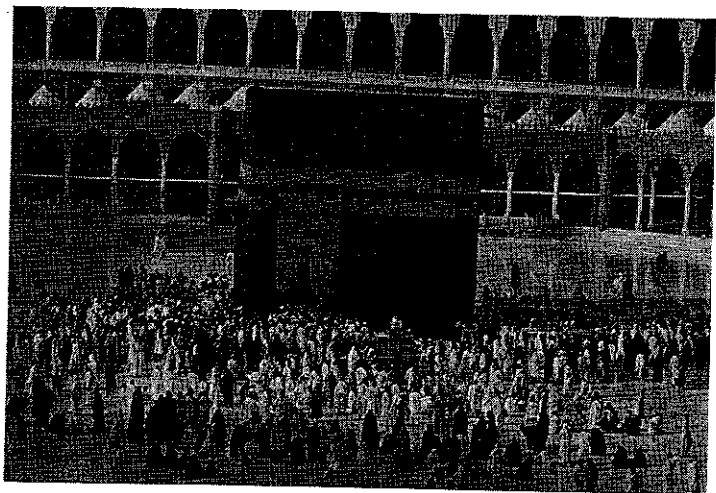
彼が指さすと、山々と丘陵がにわかに関き寄せられ、アスワン州のアル・キルハの町が眼前に現れ、ムハンマド・アブー・アル・フトゥーフ・アル・アラビー先生の家を見ました。そこで光景が変わり、同じ風貌と服装の二人の人物を見ました。私はどちらが預言者様でどちらがアル・アラビー師か分からず混乱しました。そこでアル・アラビー先生は脆弱な一面を示したので、私はそちらがアル・アラビー先生で、もう一人が預言者様であることが分かりました。私はアル・アラビー先生の所に行き、彼にキスし、彼が亡くなるまでお側にお仕えしました。(Valerie J. Hoffman, *Sufism, Mystics, and Saints in Modern Egypt*, pp.65, 162-163, 268-269)

預言者ムハンマドはこうして今もなお、ムスリムの間に生き続けているのである。

7 宣教の開始

マッカでの迫害

前近代においては、「史的ムハンマド」はあくまでも「超越的ムハンマド」の存在状態の一つの相と理解されていたことを確認しつつ、「史的ムハンマド」の生涯に戻ろう。



マッカのカアバ神殿

預言者ムハンマドが最初に啓示を説いた相手は妻のハディースジャであった。召命から初めの三年の間は、ムハンマドは家族などのごく親しい者にのみ、イスラームの教えを伝授した。この初期のイスラームの入信者の中に、後に初代カリフとなる二歳年下の親友アブー・バクル、彼がイスラームに誘った名門ウマイヤ家の貴公子で後に三代カリフとなるウスマーン、四代カリフとなるムハンマドの甥で女婿のアリーらがいた。

信者の数が三〇人ほどになった時、マッカ市民を前にして公然とイスラームの教えを説くようにとの啓示がムハンマドに下った。

当時のマッカはアラビア半島の諸部族の部族神の偶像を祭るカアバ神殿を擁する門前町であった。カアバ神殿には三六〇体の偶像が安置され、巡礼の季節には、半島の各地から集まる巡礼たちでにぎわい、大きな市が立っていた。マッカは彼ら巡礼の落とす財貨で栄えていた。

これらの偶像の神威を否定するイスラームの教えは、カアバ神殿の偶像もたらず利権で潤っていた町の有力者の経済的基盤を根底から揺るがすものであった。それゆえムハンマドとイスラームの信徒団は、マッカの多神

教徒たちから激しい迫害をこうむることになる。

迫害が激化し、信徒の中から殉教者が出るにおよんで、ムハンマドは一〇〇名足らずの信徒を紅海を挟んだ対岸のエチオピアに亡命させる。当時のエチオピアはキリスト教王国で善政が敷かれていたからだという。ムハンマドは少年時代から東ローマ帝国領シリアへの隊商貿易などで広い世界を知っており、「アラブ」の枠を超えた視野から発想することのできる「国際人」であったのである。

召命から一〇年目、西暦六一〇年、孤児であったムハンマドの叔父で育ての親でもあったアブ・タリブが、そして同年、最初の信徒であり良き理解者でもあった最愛の妻ハディースジャも亡くなった。それゆえこの年は「悲しみの年」と名づけられる。

ヒジュラ

当時のアラビア半島には中央集権国家、いやそもそも「国家」というものは存在しなかった。「アラブ」は離合集散を繰り返す多くの諸部族の構造を欠く集合体でしかなく、王もいなければ、国防にあたる常備軍、治安を司る警察もおらず、常設の法廷も存在しなかった。

国家のないアラブの部族社会において、警察に代わって個人の生命の安全を保障したのが、部族による血讐システムであった。つまり部族のメンバーが他の部族から殺害された場合、メンバーを殺された部族はその部族の名誉にかけて相手方の部族のメンバーを殺害し、部族間の勢力の均衡を維持する、というシステムである。ムスリムたちの中で迫害の犠牲となって殉教者となったのは、有力な部族の庇護を受けない社会的弱者たちであった。

この血讐システムの要は部族の名誉を命よりも重んずる部族意識にあった。ハシム族に属したムハンマドは偶像崇拜を否定し、偶像崇拜者であったハシム族の先祖たちが地獄に落ちると宣告し、先祖と先祖伝来の部族の宗教を侮辱した。アブ・タリブはハシム族の族長として、甥のムハンマドを庇護したが、アブ・タリブの死後、ハシム族の族長になったアブ・ラハブはムハンマドを部族の名誉を汚す裏切り者であるとして、彼への庇護を取り消した。

ハシム族の集団的庇護を失ったムハンマドと彼に従うムスリムたちへの迫害がますます激化する中、ムハンマドはアウス族、ハズラジュ族の二大部族の抗争に倦んだヤスリブの町から調停者、指導者として招かれることになる。

殺人犯の処罰ではなく、無差別な敵対部族員の殺害による勢力均衡の回復を図る血讐安全保障システムは、部族間抗争の強力な抑止力となったが、一旦、相互報復が作動を始めると復讐の連鎖がエスカレートし悪循環を断ち切ることができなくなるという大きな欠陥を有していた。ちょうどこの時ヤスリブでは、アウス族、ハズラジュ族の二大部族の間で収拾のつかない復讐の悪循環が生じ、平和の回復のために強力な権威を有する調停者が必要とする状況が現出していたのである。

ヤスリブがこのような事態に陥っていた時、召命後一年目を迎えたムハンマドは例年のように巡礼の儀礼中、カアバ神殿に詣でた諸部族の巡礼たちの間をめぐり、イスラームへの帰依、偶像崇拜の中止を宣教していた。そしてこの時ムハンマドの教えを聞き、入信した者の中に、ヤスリブから来たアウス族とハズラジュ族の巡礼団がいたのであった。彼らはヤスリブに戻ってヤスリブの部族民たちにイスラームの教えを伝えた。

その翌年の巡礼月に、一二人のヤスリブの部族民の代表者がマッカに預言者を訪れ、彼に忠誠を誓った。さらにその翌年の巡礼月には、男性七三人と女性三人ともいわれるヤスリブの使節団がマッカを訪れ、ムハンマドに服従し、武力をもって預言者とその教えを守護することを誓った。ムハンマドは彼らの中から各部族の指導者一二名を選んだ上で彼らをヤスリブに送り返した。

こうしてマッカでの多神教徒による迫害が強まる中で、ヤスリブでは預言者ムハンマドの受け入れの準備ができあがった。ついに召命後一二年目、西暦六二二年、信徒団を先にヤスリブに逃した後、ムハンマドはアブー・バクルと二人でヤスリブに移住する。ヤスリブの信徒たちは、詩を合唱し、娘たちはタンバリンを打って、喜びを表し、彼を迎えたという。

これが世に言う「ヒジュラ（聖遷＝亡命）」であり、以降、マッカからヒジュラしたマッカの信徒たちを亡命者、彼らを迎え入れたヤスリブの信徒たちを援助者、預言者ムハンマドを迎えたヤスリブは「預言者の町（マディーナ・アル・ナビー）」、略してマディーナと呼ばれるようになる。

8 ヒジュラと「国家」建設

マディーナ憲章

ヒジュラはイスラーム史における分水嶺となった。イスラームは、預言者ムハンマドの誕生でも召命でもなく、このヒジュラの年をもって、イスラーム暦元年と定める。

マディーナに定住したムハンマドは、マッカから亡命したムスリム信徒団とマディーナ在住のアラブのムスリム、多神教徒、ユダヤ教徒の諸部族の間で集団安全保障協定を締結する。

現代の研究者はこの文書を「マディーナ憲章」と呼んでいる。以下はイブン・イスハークの『預言者伝』の収録する「マディーナ憲章」の主な条文である。

慈悲あまねき慈悲深いアッラーフの御名において、

これは、預言者ムハンマドによる、クライシュ族（亡命者）とヤスリブの民と、彼等に従い、提携し、共に戦う信徒、ムスリムの間の文書である。

これらの者は、他の人々と区別された一つのウンマ（共同体）を構成する。

クライシュ族の亡命者は自分たちの「血の代償」の慣習法に従って、お互いの間で「血の代償」を履行し、信徒の間での良識と正義に則って、捕虜を身請する。

アウフ族は自分たちの「血の代償」の慣習法に従って、お互いの間で従来通りの「血の代償」の支払いを履行し、各支族が信徒の間での良識と正義に則って、捕虜を身請する。（中略 以下同じ文言が各氏族について繰返される）

信徒たちは、困窮した同胞を見捨てず、彼に相応の身代金、血の代償金を与えねばならない。

信徒は、別の信徒の解放奴隷と、彼（その解放奴隷の元の主人である信徒）との敵対関係において同盟を結んではならない。

敬虔な信徒たちは、信徒であっても和を乱す者、信徒の間で不正な暴力、犯罪行為、乱暴狼藉

をはたらく者とは対決し、たとえそれが自分たちの誰かの実子であろうとも、全員でその者に対処しなくてはならない。

信徒は不信仰者のために信徒を殺してはならないし、(信徒と不信仰者の争いで) 信徒に敵対して不信仰者を助けてはならない。

アッラーフの安全保障は単一であり、最低位の者にも全体に対して効力を有する。

信徒以外の者に対して、信徒は相互に安全保障を保障しあう。

我々に服属するユダヤ教徒には、扶助と平等が与えられ、不正をこうむることも、その敵に援助が与えられることもない。

信徒たちの和平は一つであり、アッラーフの道の戦闘においては、公正で全員一致でない限り、どの信徒も他の信徒と歩調を合せず単独で和平を結んではならない。

我々と共に出撃する遠征隊は、隊伍を組まねばならない。

信徒たちは、アッラーフの道に流された血のために、集団で復讐の義務を負う。

敬虔な信徒たちは裁量、至善の導きのもとにある。

多神教徒はクライシュ族の財産や人身を保護下におくこと、また信徒に敵対して介入することは許されない。

故なく信徒を殺害した証拠のある者は、殺された者の親族の(血の代償金の受け取りか、恩赦の)了承が得られた場合を除いて、同害報復刑に処される。信徒は全体でこの犯罪者に当たらねばならず、刑を執行しないことは許されない。

この協約の内容を承認し、アッラーフと最後の審判を信する信徒は、罪人を助け、庇護することとは許されない。罪人を助け、庇護する者には、最後の審判の日にアッラーフの呪いと御怒りがあり、悔悟も償いも受け入れられない。

何事であれ、汝らの意見が割れた場合には、その問題(の解決)は尊くも畏かしこきアッラーフと、ムハンマドに委ねられる。

ユダヤ教徒も戦争に参戦する限り、信徒らと共に戦費を負担しなくてはならない。

アウフ族のユダヤ教徒は信徒らと並ぶ一つのウンマである。

自由民であれ解放奴隷であれ、ユダヤ教徒とムスリムは、それぞれ自分たちの宗教を保持する。ただし不正をはたらき、罪を犯す者は別で、その者は自分と自分の家族を滅ぼすのみである。

アル・ナッジャール族のユダヤ教徒もアウフ族のユダヤ教徒と同じ権利と義務を有する。(中略、以下、各氏族のユダヤ教徒たちがいずれも同じ規定に服すべきことがそれぞれの名をあげて確認される)

彼等(信徒たち)の誰もムハンマドの許可なくして出征してはならない。

ただしそれは傷害への報復を妨げるものではない。他人を殺す者は自らも殺される。ただし不正を犯した者に対しては別であり、アッラーフはこの協約に忠実な者を嘉よみしたまう。

ユダヤ教徒は自分たちの戦費を負担し、ムスリムも自分たちの戦費を負担する。ただしこの協約を締結した者と戦闘に入る者に対しては、両者は協力しあわねばならない。両者の間では協議と忠告がなされねばならない。敬虔は不義と相容あひまれない(人は他人の罪を負わされることはない)。誰もその同盟者の罪を負わされることはない。

不正をこうむった者は援助されねばならない。

ユダヤ教徒も戦争に参戦する限り、信徒たちと共に戦費を負担しなくてはならない。

ヤスリブの内部は、この協約の当事者にとって聖地である。

この協約の当事者の間に、悪影響の予想される事件や紛争が生じた場合は、その問題はいと尊くも畏きアッラーフと、アッラーフの使徒ムハンマドに委ねられる。

アッラーフはこの協約の内容を誠実に順守する者を嘉される。

クライシュ族と、彼等を援助する者には保護は与えられない。

ヤスリブを急襲する者に対しては、彼等（信徒たち）は相互に助け合わねばならない。

彼等（ユダヤ教徒）が和平を求められれば、相手が和平を結び、それを維持する限り和平に応じ、それを維持せねばならない。もし彼等（信徒）が同様なことを求められれば、宗教（イスラーム）のために戦う者を除き、ムスリムも彼等に同様に対応しなくてはならない。

すべての人々は、自分の属する側で自分の分担を負う。

アウス族のユダヤ教徒は自由民も解放奴隷も、この協約の民と同じ権利義務を負い、この協約の民からまったたく誠実なあつかいを受ける。

敬虔は不義と相容れない。人は他人の罪を負わされることはない。

アッラーフはこの協約の内容を誠実に順守する者を嘉される。

ただしこの協約は、不正をはたらく者、罪を犯す者を保護するものではない。

マディーナに於いては、不正をはたらく者、罪を犯す者を別として、出ていく者も、留まる者

も安全である。

アッラーフは敬虔で、神を畏れる者の庇護者であられ、ムハンマドはアッラーフの使徒である。

イスラーム「国家」の原型

「マディーナ憲章」は、ムハンマドに司法、行政、外交の最高決定権を委ね、対外的には団結して外敵にあたる集団安全保障、対内的には無差別血讐システムの廃止、犯罪者の引き渡しと罰則の規定、信教の自由、正義の原則、財産権の保証、戦費負担の義務などを定めるものであった。

先に述べたように、当時のアラブは国家を有さなかった。その意味で、マディーナ憲章は、国家を創設する社会契約の名にふさわしい。そしてこの時点においてマディーナには、在地のアラブのアウス、ハズラジュの二大部族、マッカから移住してきたクライシュ族のムスリム、そしてカイヌカーウ、ナディール、ハイバルの三大部族のユダヤ教徒がおり、アウス、ハズラジュのアラブ二大部族内にもイスラーム未信の多神教徒からなる部族が三部族あったといわれる。つまりムハンマドは、マッカからの亡命者とヤスリブのムスリムだけではなく、ムスリム、非ムスリムの多神教徒、ユダヤ教徒の自発的な合意、すなわち諸共同体の基本権と義務を定める社会契約「マディーナ憲章」の締結により、「立憲連邦国家」ともいべき政体を創立したのであった。

マディーナ憲章の締結は、イスラームにおける「国家」の原型となったばかりでなく、イスラームにおけるムスリムと異教徒との共存の最初の試みでもあった。

このマディーナ憲章を基に、現代トルコのイスラーム思想家アリー・ブラチュが多数の集団がそれ

ぞれ広範な法的自治権を有する「イスラーム的多元モデル」と呼ばれる国家モデルを提示し、他方インドネシアのイスラーム思想家ヌルコリシュ・マジドが契約に基づく法の支配する倫理的な社会「市民社会（「マディーナの社会」）論を展開していることは、このマディーナ憲章が、単に憲政史上の金字塔としての歴史的意義を有するのみならず、民族問題への有効な処方箋を持たない現代国民国家システムに対する一つの有力なアンチ・テーゼとして、今なお価値を失っていないことを示しているといえよう。

9 イスラーム国家の確立

戦いの日々

マディーナ憲章締結の時点においては、ムハンマドは司法、行政、外交の最高決定権を委ねられていたが、統治者というよりも調停者であった。諸部族の自治権はなお大きく、マディーナに生まれた都市国家は、部族連合の色彩を色濃く残していた。またユダヤ教徒と多神教徒を数多く抱え、社会規範に関わる啓示がまだ少なかったこともあり、当初は全体としてのこのマディーナの都市国家はまだイスラーム国家と呼び得る実体を備えていたとは言いがたかった。

マディーナに移住したムハンマドの最初の事業はモスクの建設であった。それ以前のマッカでは、ムハンマドと信徒たちは、ある時は、信徒の家に集まり、ある時は、偶像の館と化していたカアバ神殿の境内で礼拝しており、自分たちのモスクを建造することはなかった。また週に一度金曜の日中に町中の信徒が大モスクに集まって行う金曜集合礼拝が義務づけられるのも、マディーナにイスラーム国家が成立してから後の事である。

しかしこの新しい国家の建設は障害なしには進められなかった。ムハンマドと信徒たちは、マッカの多神教徒の襲撃を迎え撃たねばならなかったのである。

最初の戦いは、ヒジュラ暦二年（西暦六二四年）に起きたバドルの戦いであった。これは約一〇〇〇名の多神教徒軍を三〇〇名あまりのムスリム軍で迎え撃った戦いであったが、多神教徒軍はアブ・ジャハルら有力者約七〇名の戦死者を出して敗走した。預言者ムハンマドは、マディーナに移住してから逝去までの後半生をイスラーム国家のための戦いのうちに終えることになる。バドルの戦い以来、預言者自らの参戦した戦役は二〇回あまりにのぼる。

このバドルの戦いの中で、預言者ムハンマドの宗教／政治的権威の性格を知る手掛かりとなる、以下のような興味深い伝承が残されている。

使徒が軍を進め、バドルの地に近い水場に到着し、そこに野営しようとした時、教友の一人アル・フバーブが進み出て、預言者に次のように尋ねた。

アッラーフの使徒様。この場所は、至高なるアッラーフがあなたにここで止まることを命じられたのでしょうか。それなら、我々はここから前にも後ろにも動きません。それとも、ここで停まったのは、あなた様ご自身の判断、戦略、作戦でしょうか。

預言者が「いやこれはわたし自身の判断、戦略、作戦である」と答えると、アル・フバーブは、バドルの水場から、多神教徒の敵軍を遮断できる戦略的により良い他の場所まで軍を進めて野営するよう献策した。

このエピソードは信徒たちにとって、預言者の政治的権威において「宗教的」権威と「世俗的」権威が概念的に明確に区別されていたことを示している。預言者の政治的決定には、アッラーフからの天啓の指示による神的命令の執行、個人的判断に基づく人的裁定、という二つの異なる種類があるのである。前者がすべてをみそなわす神の命令の代行に他ならないがゆえに議論の余地のない絶対的権威であるのに対して、後者はあくまでも人間の決定である。それゆえ採用するかしないかは最終的に預言者の判断によるとしても、進言、議論の対象となるのである。

つまり預言者の政治的権威には、超越的起源に由来し理性を超えた神的かつ絶対的な「宗教的」権威と、理性的議論の対象となる人々に推戴された為政者としての「現世的」権威があったのである。預言者ムハンマドには、巫(ふ) (ジャーマン) 王的側面と、同輩中の第一人者としての政治軍事指導者の側面が共存していた、と言うこともできるであろう。

内なる敵

ムハンマドはマッカの多神教徒と戦いつつ、内なる敵と戦わねばならなかった。内なる敵とは、マディーナの偽信者たちとユダヤ教徒たちであった。

偽信者の中心はアブド・アッラーフ・ウバイユであった。ウバイユは預言者ムハンマドが裁定者としてマディーナに招かれた時、マディーナの王になろうと画策していた。預言者ムハンマドの来訪の後、アブド・アッラーフ・ウバイユは形式的にはイスラームを受け入れたが、預言者のせいにならぬ損ねた恨みを忘れず、マディーナに生まれたイスラーム国家の獅子身中の虫として、外敵と通じてイスラーム国家の打倒を策し続けた。しかし使徒はこれらの偽信者に対しても、外面的にイスラームの信仰を表明している限り内心の背信を理由に背教の罪を問うことはなく、彼らが外患罪によって処刑されることもなかった。

一方、ユダヤ教徒については、外敵に通じムスリムに危害を加えマディーナ憲章に背いた彼らを、預言者ムハンマドは徐々に排除していった。最初に追放されたのはカイヌカーウ族であり、次いでアル・ナディール族が戦闘の後に降伏し追放された。最後に残ったクライザ族も、ヒジュラ暦五年(西暦六二七年)にムスリム軍と多神教徒の部族連合軍との戦闘中にマディーナ憲章を破棄し多神教徒側についたため、ムスリム軍は部族連合軍を撃退したのち、クライザ族の砦を包囲し無条件降伏させ、戦闘員である成人男性を処刑し非戦闘員である女子供を奴隷とした。

イスラーム史において、ユダヤ教徒とムスリムの関係は概して良好であった。一五〜一六世紀のスペインの異端審問、異教徒追放の嵐の中で、イベリア半島を追われたユダヤ教徒をオスマン・カリフ帝国が迎えたことは有名であるが、イスラーム史を通じて、ムスリム諸王朝ではユダヤ教徒は医師、政商として重用されていた。ヨーロッパで間歇的に繰り返された「ユダヤ人」の集団虐殺「ポグロム」はイスラーム世界では報告されていない。

イスラームの発想では、預言者ムハンマドの時代、初期イスラーム史は、他の時代とはまったく違う聖史として規範的価値を有する。一三〇〇年以上にわたるムスリムとユダヤ教徒の共存の歴史にもかかわらず、現在のイスラーム世界において、「反イスラエル」反シオニズム「反ユダヤ」の政治的言説が官民を問わず圧倒的に支持されているのは、規範的歴史たる預言者の時代の戦史から抽出された「狡猾な不倶戴天の敵」としてのユダヤ教徒のイメージが、パレスチナのムスリムの虐殺、追放、弾圧の上に成立した現代のユダヤ国家イスラエルに投影され増幅されたからに他ならない。

マッカ入城

ユダヤ教徒の追放によってマディーナは、マイノリティのエスニック・グループである異教徒の存在しないイスラーム国家となった。そしてこの頃には、マディーナのムスリムとマッカの多神教徒の力関係は、完全にムスリム側が優位となっていた。預言者の眼差しはすでにアラビア半島を越え、東ローマ帝国、ペルシャ帝国、エチオピア帝国等の外の世界に向けられていた。ヒジュラ暦八年（西暦六三〇年）、預言者は諸皇帝、諸王らにイスラームへの入信を呼びかける書簡を送る。
東ローマ帝国皇帝への手紙は以下の文面であった。

慈悲あまねき慈悲深いアッラーフの御名によりて

アッラーフの使徒ムハンマドより、東ローマ皇帝ヘラクレイオスへ

(アッラーフの)導きに従う者に平安あれ

私はあなたをイスラームの教えに招く。

イスラームに入信せよ。さすればあなたは安全となる。

イスラームに入信せよ。さすればアッラーフはあなたに二度の報酬を与う。

もし背を向けるなら、あなたは臣下の罪をも負うこととなる。

「啓典の民よ。我々とあなたの方の間で共通の『我々はアッラーフ以外のなにものをも崇拜せず、また同位に配しません。またアッラーフ以外に、我々の同輩である人間を主としません。』との言葉のもとに來たれ。もし彼等が背き去るなら、『我々はムスリムである。』と証言して言うがよい。」
(クルアーン三章六四節)

ムスリムの歴史家の伝えるところでは、この書簡を受け取った皇帝はマッカの多神教徒の指導者アブー・スフヤーンを召喚し、預言者について質問し、その返答を聞いて「もしお前の言うことが本当なら、まことに彼は預言者である。私はその者が現れるのを知っていたが、お前たちの間から現れるとは思っていなかった。もし私が彼に近づけると分っていれば、私は彼に会いたいと思ったことだろう。また私が彼の側にいたなら、彼の両足を洗ったことであろう。彼の権勢は私の足下にまでおおよぶことであろう。」と述べた、といわれている。

同年、マッカに向かったムスリム軍に対してマッカは無血開城する。二〇年にわたるイスラームに対する迫害、七年におよぶ戦争にもかかわらず、預言者はマッカの多神教徒たちに、いかなる処分も

行わず、損害賠償も求めず、過去の罪に大赦を与えた。この大赦から除外されたのは、マディーナで殺人を犯して背教しマッカに走った者など一五名だけであり、その多くも後に処罰を免じられ、実際に処刑が執行されたのは四名に過ぎなかった。

ムハンマドは、大赦にあたってイスラーム入信を条件としなかったため、マッカ征服の時点ではマッカの住民たちの大半は多神教徒のままであった。ムハンマドはマッカに入るや否や、カアバ神殿に詣で、そこに安置されていた三六〇体へのぼる偶像をすべて破壊した。マッカの住民たちが、そろってアッラーフとその使徒に服従するとの忠誠の誓いを立て、イスラームに入信したのはその直後のことである。

10 使徒の崩御

大巡礼を終えて

預言者によるマッカ征服の直後、アラブ遊牧民ハワーズィン族、アル・タイフのサキーフ族の連合軍がマッカに來襲した。預言者はマディーナから引き連れてきた信徒と新たに加わったマッカの新入信者たちを指揮して迎え撃ち、これを打ち破り、膨大な戦利品を手にした。

ところが使徒はその戦利品をマッカの新入信者たちに分け与え、マディーナから随行した古参の援助者たちは何一つ配分に与らなかつた。そのため一部の援助者の中には、故郷のマッカに錦を飾った

使徒の心はマッカの同郷人のもとに戻ってしまい、もうマディーナの援助者たちのことなど顧みなくなつた、などと不満を述べる者が現れた。そこで預言者は援助者たちを集め、戦利品の分配は、信仰のまだ弱い新入信者たちのための現世利益の褒賞であつたことを教え、語りかけた。

私は汝らを信頼していればこそ、汝らは何も与えないで済ませていたのだ。援助者たちよ、汝らは、他の人々は戦利品として羊とラクダを持ち帰るが、汝らはアッラーフの使徒と共にマディーナへの帰途につくことで満足はしないのか。

これを聞いた援助者たちは「我々はアッラーフの使徒様が、我々への戦利品、分け前であることに満足です」と答え、感涙にくれた、と言われる。

こうして預言者はマッカを後にしてマディーナに戻つたが、翌ヒジュラ暦九年、大巡礼の儀を果したため、再びマッカに向かう。これが預言者が召命後に行った最初で最後の大巡礼となる。預言者がその年に巡礼を行う、との噂が人々の耳に届いたため、アラビア半島の隅々から、信徒たちが巡礼に押し寄せた。その数は一部の歴史家たちによると一四万人に達したという。

この巡礼における説教の中で、預言者は自らの死期の近いのを予見して「来年以降この場所で汝らに会うことはおそらくあるまい」と述べていたが、マッカでの巡礼を終えてマディーナに帰還して間もなく病の床につく。

病に倒れる前のある夜、預言者は教友の一人アブー・ムワイハバと共に墓地に詣で、死者たちの冥

福を祈られた。アブー・ムワイハバは、その時の会話について以下のように伝えている。

「アブー・ムワイハバよ、私はこの世の財宝の鍵と、この世で永く生きて天国に入れる許しを戴き、それを取るか、それとも天国で我が主と拝謁できることを選ぶか、の二者択一を与えられた。」と言われた。

それを聞いたアブー・ムワイハバは「あなたは私の父と母より大切な御方です。どうかこの世の財宝の鍵と、この世で永く生きた後天国に入ることを選んで下さい。」と頼んだが、使徒は「アッラーフにかけて、アブー・ムワイハバよ、私はもう天国での我が主への拝謁を選んでしまったのだ。」と答えた。

使徒はこう言うと、死者たちへの御赦しをアッラーフに祈られたあと、墓地をあとにされた。そしてアッラーフが使徒を御許に召されることになる病苦が使徒を襲ったのは、ちょうどその夜からであった。

使徒は妻アイシャにみとられて亡くなった。使徒の臨終の様子をアイシャは以下のように伝えている。

使徒はスイワーク（木の歯ブラシ）で、そのとき初めて見るほどに強く歯を磨かれ、それを下に置かれました。そして私は使徒が私の胸で（急に）重くなられたのを感じました。それで私が使

徒の御顔を覗きこみますと、使徒はすでに目を閉じられ、「いや、天国の最高の伴侶を」と言われました。

私は「真理を授けてあなたを遣わされた御方にかけて、あなたは選択を与えられ、すでにお選びになられました。」と言いました。そして使徒は天に召されたのでした。

アッラーフの使徒崩御（使徒崩御）の報が流れると、多くの主だった古参の教友たちでさえ恐慌状態に陥った。後に第二代カリフとなる、豪胆をもって知られたウマルまでもが「使徒は今ただお隠れになっただけで、やがて自分たちのもとにまた帰って来るのだ。」と口走るありさまであった。

初代カリフとなったアブー・バクルだけが冷静で、死装束に包まれ寝所に横わったアッラーフの使徒にくちづけし、こう語りかけた。

アッラーフの使徒よ、あなたは私の父や母より愛しい御方です。生も、死も、あなたにはなんと素晴らしいことでしょう。アッラーフがあなたに定め給うた死をあなたはすでに味わわれ、もはやあなたは決して死を味わわれることはありません。アッラーフの使徒よ、あなたの主の御許で、我々のことを思い起こして下さい。

そしてアブー・バクルは人々に対して「人々よ、ムハンマドを崇拜していた者にとって、まことにムハンマドは逝かれた。しかしアッラーフを崇拜していた者にとっては、まことにアッラーフは生き